

---

# 僕らの戦争

深尋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕らの戦争

### 【コード】

N8906J

### 【作者名】

深尋

### 【あらすじ】

俺たちは、『戦争』を始めた。

改革のための、幾らかの希望を種に。

・・・なんて建前で、本当は思いつきと軽はずみな同意のせいですが、始まってしまった『戦争』は思いも寄らぬ嘘と真実を照らし出す。

俺たちの、勝ち取るための『戦争』の物語。

始まる。

「アズマツ、早く援軍をよこしてくれ！」

「今やってるよ！カナエくん、兵の治療はまだかかるの？」

「んなこと言ってもなあつ。どんだけ早う動いても5分6分かかるで。」

「マツキン5、6分稼いで！」

「おう分かった！アズマ隊から救護に数人回して！」

「了解！」

敵地に乗り込んだ。

兵の質は圧倒的に自軍が有利。

マキとアズマが次々と敵兵をなぎ倒す。

戦いのうちで傷付いた兵達はカナエ率いる救護班へ。

なかなか、順調なはずだった。

ところが、予想外なことに敵の隊長を倒すのにてこずってしまったのだ。

いやいや、もつと弱いはずだったんだけど。

大方、偵察班のデータ分析ミスである。イマイチ信用できない班だ。流石は『緊急設置班』。

ソレとは雲泥の差、マキ率いる班はとても頼りになる。

もつとも今はズタボロに傷付いた兵の姿しか見えないけど。

「ウミ！わたしの援護に来て、・・・早くっ！」

「今から斬りこみ部隊であるアズマ班は救護援助隊に切り替える。負傷した兵はアズマの近くにすぐ行け！マキ隊のやつも！」

「了解！みんな、離れずあたしに付いて来て。」

「な、・・・今ウチの隊から送り出して防げるわけない！」

「死なないのが最優先だろマキ！俺とお前でなんとかするっきゃねえ！」

一時撤退するアズマの周りには美しい膜のようなものが見える。マキ隊や色々な隊からの負傷者はアズマから出る膜の内側にもぐった。

あの膜は、というとアズマ特有の技だ。

一定時間敵からの接触を拒絶することの出来る結果。兵達はアレに守られながら救護班の元へと運ばれる。

「・・・ウミ。ウチの隊とそっちの隊の兵数、半数以下に減った。」

「お前の隊はアズマんとこと同じ最前線だから、負傷者数も多い。半数ってか3分の1以下、かな。」

「合わせても、とても勝てそうな数にはならない。」

マキが膨れて言った。鏢迫り合いせほしの真っ只中だ。

「まあ、そうだけど。『5、6分』だろ？」

「この様子じゃ、とても防げそうにないよ。」

マキが敵に詰め寄られながら言う。

もっとも詰め寄られているのは俺も同じだが。

「なあ、俺がわざわざお前の近くで張ってる意味分かってないか？」

「分かるけど、駄目。」

「はあ？おま、そんなじゃ勝てっこねえぞ？」

「勝ってもそれじゃ、修理代とか色々で稼ぎがパーになるでしょ。」

「おい、此処こゝは格上だぜ？修理代くらいパーっと上回るって。」

「・・・ああ、そうか。じゃ、やろつ。」

「おっけ！その言葉待ってたぞマキ！」

『・・・まさかアイツら、』

敵の隊長格のうち数名が気付き、走り逃げようとする。

その、『まさか』の判断は立派だが、己のみ逃げるのは如何なものか。

ひとつ溜息を吐いてしまった。

「・・・行くぞマキ。」

「うん。」

「スキル発動・星鱗、月凜と共に俺に力を！」

「「黑夜凜凜！蹴散らせッッ！！」」

『うわああああああああああつ！！！！』

さて。

一体何が起きたのか、だ。

簡単に説明すると、『光による拒絶』である。

アズマの能力は敵の接触の拒絶だが、ソレは壁を作るという意味合  
いだ。

守備としては最強だが、直接的な攻撃の手段には使えない。

ところが、俺とマキの能力ボーナス課題は、『連携』。

つまりは連携して戦えば能力が倍以上に跳ね上がると言うわけである。

そして連携の課題を持つ者同士が連携するというのはある意での『脅威』となる。

何しろ、重複するから、だ。

通常、連携の課題者はもう一人と組めば『連携』とみなされ、2倍の威力で攻撃できる。

そのもう一人というのは別に、連携の課題者でないといけないわけ

ではない。

同じ国内に連携の課題者が居る可能性は低いから。ソレを、互いに連携の課題者である俺とマキとの連携では、とんでもない威力となるのだ。

説明するには難しい事例だ。

殆どの人はこんな技使えないのだから。

マキが口を開いた。

「……すつきりするっ！」

そう、俺とマキの班を囲んでいた敵兵は蹴散らされた。

今回は運が良いのか、さほど酷い崩壊具合ではなさそうだ。

(とはいえ、柱が1・2本折れてるけど気にしないようにする。)

「おっしゃあ、形勢逆転！んじゃあ敵の拠点に乗り込むかあ？」

「勿論。すぐにも行こう。星鱗の輝きが鈍らないうちに……っ！」

単身乗り込みそうなマキをまず押し留める。

「待て待て。おーいつ、アズマあー。救護のほうはもう良いか？」

「はいはあい。カナエくん、良いよね？……おっけ出ましたあー、あたしもそっちに向かおうか？」

アズマに問うと、遠くから両手でマルを作っていた。

「現時刻をもってアズマ班は、マキ班ウミ班と共に斬りこみ部隊へ変更。」

なお、部隊の指揮は斬りこみ隊長であるアズマに任せる。」

「了解。動けるようになった人はあたしに付いて来て！」

……あ、敵の本拠地で尻込みする人は要らないからね。あたしと共に、勝つ気がある人は来て。」

・・・相変わらず、マキに負けず劣らずの統率力だ。  
兵たちの士気を高める挑発ともとれる力強い言葉に多くの兵は彼女に付いて来るはずだ。

「・・・ウミ、先に行つてよう。アズマは速いから、すぐ追い付いてくるよ。」

「おお、そうだな。アズマー、ちよっくら先に行くわー！」

「はい、すぐに追い付きまーす。」

アズマに手を振り、俺とマキは敵の本拠地に向かった。

・・・ところで。

何故この戦争が起こつたのか。

事の発端<sup>ほんたん</sup>は、

マキの思いつきと、

アズマの同意と、

カナエの苦笑と、

ソラの挑発と、

俺の軽はずみな許可、

ソレら全てが折り重なって生まれたことだった。

## 兄弟喧嘩戦争。

「ねえウミ。最近ソラに逢ってない。」

「ん、ああそっぴや。だって国が違えんだもん、しゃーねえじゃん。」

「言うても今まだ、休戦中ってだけやしなあ。一応戦争続いてんで。」

「えーでも、家族じゃん兄弟じゃん！ たった一人の肉親に逢えないなんてねえ。」

4人で集まって話してた時だった。

ソラのことを真っ先に切り出したのはマキ。

マキは昔、ずっとソラと俺にべったりだったから、ソラが居ないのはやはり寂しいらしい。

前髪をいじくりながら、ちらりとこっちを見て言ったのである。

7

「別に俺はねえ、あいつが元気だったら良いんだし。」

「逢ってもないのに、元気だとか分かる、ウミ？」

軽く流して、次の話題にさっさと切り替えようと思っていた。

だがマキはじつとこちらを睨んだ。

また次に、こう口を開いた。

「ウミ、今度ソラに逢いに行こう。きっとソラもウミに逢いたいに違いない。」

「あっいいね。あたしソレ賛成。ソラくんに逢いたいし。ウミくんは逢いたくないの？」

マキの提案にアズマが威勢良く同意した。

どうやら困ったことになりそうなことが、よく分かった。

「いや、逢いたくねえわけねえよ。」

逢いたくないわけじゃ、ない。  
だが逢いたいたいと思えない。

『俺さ、もうウミより強いぜ?』

前に、ソラがそう話しかけてきた。

俺は晩飯の用意をしていたし、ソラはソラで本を読んでいた時だ。  
突然に、台所に立つ俺の背後に立ち、こう言ったのだ。

『後方だつて近接だつて、ウミに勝つてやる。』

俺はクルマキから出て行くことになったけどさ、そんな時は心配しなくて良いよ。

・・・いや、心配になったらさ戦争仕掛けて来いよ。マキたちと一緒にさ。

いつだつて相手になって、んで、いつだつて勝つてやる、絶対に。』

今でも忘れられないのは、俺に対しての刺々しい言葉と、蔑むようなあの目つき。

だけど目つきとは裏腹にソラの表情はとても誠実な、強い表情だった。

力に誠実になった弟の、ソラの、ぎらぎらした、ざらついた、獣の姿。

出て行ったとき、ソラはクルマキに帰ることは出来なくなった。

ソラの行った国、マツカゲの『偉いところ』に彼は居るらしい。  
帰って来る気なんて最初からひとつも無いんだろつ。

そして、俺やマキ、アズマやカナエにも逢いたいとは思っていない。

アイツにはアイツの日常が芽生え、今ではソレが当たり前となつて  
いるんだから。

わざわざ逢いに行くほど、ウミとソラの兄弟は仲良しとは言えない。

もとより仲が悪かったのではない。

あの時ソラの言った言葉が、俺とアイツを隔てている。

そうだ、逢いたくないわけでは、ない。

だが逢いたいと思えるような、兄弟としての、決定的なモノが抜け  
てしまった。

ウミとソラ兄弟から欠けてしまった。

絆とか、そういう安い言葉で表すモノじゃなくて。

もっと肉親でないと持ち合わせないような、もっと、無償のモノが。  
アイツは絶対に逢いたがっちゃあいない。

そして俺も逢いたくはない。

「逢いたくねえわけじゃねえ、のに逢いたくない顔してるな？」

マキが再び、じつと見つめる。

「別に俺は……。大体、この戦争中にだなあ」

「戦争中に片方に逢いに行っちゃいけないなんて、あたし、理不尽  
だと思うね。」

アズマはつまらない顔をする。

「いくら血いつながってるからって、アイツが好んで出て行ったん  
だ。」

カナエは……。何も言わなかった。

苦々しく笑って、こっちを見ているだけだ。

「じゃ、……。ない。」

マキがボソボソと、何か言った。

口の中で不鮮明に声は消えた。

「じゃ、しょうがない。」

「おい……。しょうがないって何が、  
焦る。」

どうやらまた、嫌な予感がする。

「マツカゲに戦争を仕掛ける。」

やはりだった。

こうなったら聞かないのがマキである。

ウチの女性陣は肝が据わっており、こういうのはかなり思い切ってしまう。

だが、こうなるのは分かっていたのだ。

一応決心もしておいた。

「……マキ、それで本当に良いんだな？」

マキは、うん、と言わない代わりにこくと頷く。

「だがな、そんな簡単にマツカゲを落とせると思う？」

あつこは結構な大国だ、俺らみたいので勝てると思う？」

わが国の軍事費はごくごくわずかで、ほら、全てが物語ってる。

何しろウチの国は軍事国家じゃないんだよ、俺らがガンガン喧嘩強  
いだけ。

ソレ以外は、そりゃあもう大したことねえんだよ。

勝つ負けるところじゃねえ、マツカゲに辿り着く前にそこいらの国  
に滅ぼされちまう。

ソレでも仕掛けるか、マツカゲに戦争？」

まくし立てると、マキもアズマもすっかり黙り込んだ。

「……んで、全てには段取りが必要。

戦術よりも戦略、要は知略。

真つ向から挑んで倒せる相手ではない。

だからな、他から落として行こう、そう思わないか？」

カナエは再び、俺を見た。

その表情はさつきと同じで、苦笑していた。

最後には乗って来やがったよ、コイツは本気で勝ちに行くのか、と  
いうような。

だが構わない。

初めに言ったのはマキである。

俺にここまで言わせる原因を放ったのはマキだ。

やるからには徹底的にやっつけてやろう。

マキがまた、こくと頷く。

アズマはすでにやる気を見せ、にやりと笑う。

さて、どうやってのめしてやろう。

そう考えると、ついクセでぺろりと舌なめずりした。

ソレが戦争の理由。

ただの兄弟関係のもつれ、とも言える。

だがコレは、この戦争は、戦争ではない。

国を巻き込んだ、大規模な『兄弟喧嘩』。

ある意味ただの喧嘩で、ただの喧嘩でなく戦争である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8906j/>

---

僕らの戦争

2010年10月10日20時25分発行